

地域文化遺産の保存と伝承

うすい おきたね
『 臼井興胤物語 』

～佐倉にお城があった頃～



小竹小学校区まちづくり協議会
小竹小学校図書ボランティア



皆さんは昔、小竹小学校のそばにお城があったことを知っていますか。
 小竹城は臼井城主 臼井高胤によって 1390 年頃に築城されたお城で
 小竹小学校から 500 メートル程離れたところにあり、その場所は今も
 遺跡として残されています。

お城といっても、現存する城のような大きな天守閣や石垣はなく、
 建物は「館」や「お屋敷」と呼ばれ、敵や動物から守るための「空堀」
 や「土塁」を作るなど、自然の地形が利用されていました。

○空堀とは…水のない堀で、山城に多く、障害として設けるほか、城兵の通路などにも用いる。

○土塁とは…敵や動物などの侵入を防ぐために築かれた、主に盛土による堤防上の防壁。



佐倉市でお城というと多くの方が思い浮かべるのは佐倉城ですが、佐倉城は江戸時代のお城です。

今から約 700 年前の鎌倉・室町時代、臼井氏という武将が、臼井城を中心に、今の佐倉市よりも少し広い地域を治めていました。

志津地区には志津氏の志津城があり、先崎城や井野城、岩戸城などの他の地区にある支城と共に臼井城を支えていました。

○支城とは…本城を守るように配置された補助的役割を持つ出城（本城の外の国境など、重要な場所に築いた城）・砦（要塞、城塞、城砦ともいう）・陣屋（城を持っていない下級の大名が領地内に持っていた館）などの事を指す。



それでは小竹城とも関わりの深い臼井城のお話をはじめましょう。

鎌倉時代^{かまくら}の正和^{しょうわ}3（1314）年8月7日、臼井城主^{すけたね} 臼井祐胤は病気の
ために25歳^{さい}の若さ^なで亡くなりました。その時、後継ぎ^{あとつ}である一人息子の
竹若丸^{たけわかまる}はわずか3歳でした。そのため祐胤^{ゆいごん}の遺言で、弟である志津城の
城主^{しづ じろう たねうじ} 志津次郎胤氏が、竹若丸^{げんぶく}が元服するまでの間、後見人^{こうけんじん}となりました。

○元服とは…男子が成人に達したことを示すための儀式。服を改め、髪を結い、冠をつけたりするほか、幼名を廃し、烏帽子名（烏帽子親の名から1文字をもらってつける名。元服名）を付けたりした。12歳前後に行われることが多かった。

○後見人とは…一国一郡の長や家長などが年少であるとき、その代理となったり、補佐したりする人。



しかし志津次郎は、1年もしないうちに自分が臼井城主になろうともくろみ、竹若丸の命を狙いました。

それに気づいた竹若丸の乳母 阿多津は、信頼していた岩戸城の城主 岩戸五郎胤安に密書を送り知らせました。

その頃、岩戸城は志津城と並ぶ臼井城の支城でもあり、印旛沼を隔てた向かい側にありました。



志津次郎が竹若丸の命を奪おうとした日の前夜、岩戸五郎は誰にも
知られぬように山伏になりすまし臼井城へ向かいました。

そして竹若丸を山伏が背負う「笈」の中に隠し入れ、小さな舟を自ら
漕いで印旛沼を渡り、臼井城から無事、岩戸城に逃がしました。

更に岩戸五郎は竹若丸を連れ、密かに岩戸城を出て鎌倉の建長寺に
向かいました。

○山伏とは…山中で修業をする修験道の行者。

○笈とは…背に負う経文などを入れる籠。「ふみばこ」とも言われた。



ここで竹若丸の命を救った阿多津の話をしてしましよう。

竹若丸を逃した阿多津も東に向かって逃げ、印旛沼のほとりの葦の
しげ茂みの中に隠れて、夜になるのを待っていました。

しかし追手の迫る中、阿多津は運悪く咳をしてしまい、なんと志津
次郎に見つかり殺されてしまいました。



咳をしてしまったことで見つかり、殺されてしまった阿多津を、村人たちはかわいそうに思い、その場所（現在の臼井幼稚園近く）に石の祠を建ててお墓とし、麦こがしとお茶をお供えしました。

麦こがしは咳込みやすい粉ですが、これをお茶と一緒に供えれば咳が治るという事で、それ以来「咳の神様」として、たくさんの方がお参りするようになりました。



一方の岩戸五郎は、無事、竹若丸を鎌倉の建長寺に連れていくことができました。

そして仏国^{ぶつこく}禅師^{ぜんじ}に、竹若丸が元服^{げんぷく}をするまで育てていただけるようお願いをしました。

その後、岩戸城^{もど}に戻った岩戸五郎でしたが、やはり阿多津^{どうよう}と同様に竹若丸を逃がしたという理由^{りゆう}で志津次郎に岩戸城^{こうげき}を攻撃され、自害^{じがい}に追い込まれてしまいました。



そののち竹若丸は建長寺で、仏国禪師に、また彼の亡き後は仏真禪師に
わが子のように大切に育てられました。

そして19歳で元服をし、名を行胤と名乗りました。

仏真禪師は、当時の鎌倉幕府に、行胤が臼井城主であることを認める
ように何度も請願しましたが、聞き入れられませんでした。



仏真禪師は行胤に、その頃力を持ち始めていた足利尊氏に従うように
勧めました。そして行胤は足利尊氏の配下の武将となり、24歳の時に
「筑前（九州）多々良浜の戦い」での功績を認められ、室町幕府初代将軍
となった足利尊氏から、生まれ故郷である臼井城に戻ることを許されま
した。

そして26歳の時、足利尊氏から臼井家を再興するという意味で興胤
の名前をもらい、臼井城主となりました。

このことから、興胤は今も「臼井家中興の祖」と呼ばれ、その功績を
たたえられています。

○中興の祖とは…一般に「名君」と称される君主または統治者のうち、長期王朝・政権の中途、
かつ危機的状況後に政権を担当して、危機からの回復を達成し、政権の安定化や維持に多大な
功績があったと歴史的評価を受ける者をいう。



- 1 圓應寺
- 2 西福寺
- 3 報恩寺
- 4 円通寺
- 5 常安寺
- 6 清久寺
- 7 少林寺
- 8 雲祥寺
- 9 浄光寺
- 10 宝樹院

佐倉市立小竹小学校 阿多津の墓 臼井城跡

興胤は自分が臼井城に戻ることができた恩に報いるべく、臼井城下に建長寺と同じ臨済宗のお寺を十か寺建てました。

そして乳母 阿多津のお墓も供養し、志津次郎に殺された岩戸五郎の岩戸城跡には西福寺を建立しました。また阿多津のお墓にほど近い所に、仏真禅師により開山した圓應寺を建立しました。

以来、圓應寺は臼井氏の歴代の墓所として崇敬され、境内には『忠臣岩戸胤安墓』と刻まれた岩戸五郎のお墓が今も大切に祀られています。

○崇敬とは…あがめ、うやまうこと。

—— 以上は宝樹院歴代伝承並びに臼井圓應寺古文書による



『宝樹院のサザンカ』

※佐倉市指定文化財（天然記念物）に指定された（令和2年
3月23日）古木で、「興胤公お手植え」と伝えられている。

